



2月14日

恵那高生が実際の投票箱で生徒会選挙

恵那高等学校で、市の選挙管理委員会から貸し出された投票箱や記載台を使った、生徒会役員選挙が行われました。生徒が選挙に興味を持ち、有権者になることへの自覚を持つことを目的として実施され、1・2年生432人が参加しました。

立候補者の立会演説が終わると、投票用紙を持った有権者の生徒らは、順番に記載台へ移動。鉛筆で投票用紙に書き込み、折りたたんで投票箱の中に入れていきました。

投票を終えた2年生の近藤ちこさんは「このような形で投票を行ったのは初めて。緊張感があった」と感想を述べました。



1月29日

明智中生がまちづくりの提案

明智中学校で、生徒と市長との懇談会が行われました。昨年行われた「市長と語る～まちづくり懇談会～」の明智町会場に親子で参加した生徒が、中学校の生徒にも話してほしいと希望したことから実現。1時限目は、小坂市長が全校生徒109人を前に、市の現状と取り組みについて説明しました。2時限目では、2年生生徒41人が恵那市を盛り上げる提案や住みやすい町にするための提案を発表しました。

石井開さん（2年生）は「提案したことが一つでも実現できれば、みんなで楽しむことができそうです」と感想を述べました。



1月25日

生徒のアイデアがユズの和菓子に

恵那北中学校で、1年生27人がユズを使った和菓子作り体験をしました。

生徒は総合的な学習で、地元特産品のユズについて学習。収穫体験や加工工程の見学を通じて、ユズをもっとアピールしたいと思い、ユズを使った和菓子を考案することになりました。

アイデアを形にするための講師は、かさぎゆず組合員で和菓子職人の林静雄さん。白あんにユズゼリーを練り込んで和菓子を作りました。林さんが緑の色素を練り込み、見事な形のユズの葉っぱを作ると、生徒からは驚きの声が上がりました。「葉っぱに命が吹き込まれた」と話す生徒もいました。



1月24日

キャッシュレス決済導入に向け説明会

キャッシュレス決済の導入を進めてもらおうと、恵那文化センターで説明会が開かれ、事業者ら約120人が参加しました。

消費税増税への対応や、外国人旅行者の需要への対応として、キャッシュレス化の推進機運が高まっています。疑問や不安を解消しクレジット決済の導入を進めてもらうため、決済サービス6社から提供するサービス内容が話されました。参加者は各社の特長や導入費用などを、熱心に聞きました。個別相談会もあり、各社のブースでは、決済時のスマートフォンの使用方法や、カード決済用の専用端末の操作方法を聞く姿が見られました。



2月17日

伝統芸能の魅力に拍手喝采

恵那文化センターで伝統芸能大会が開催されました。29回目となる今回は、伝統文化を保存継承する9団体が出演し、地歌舞伎や万歳、舞踊などを披露しました。大人と一緒に演じる子どもらの姿も多く見られ、会場からは盛んに拍手が送られました。

毎年恒例の「お目見得だんまり」では、市内各団体代表9人が出演。自身の生い立ちや日ごろの活動を、順番に歌舞伎調の台詞で語りました。声援が飛び、ステージ上はおひねりでいっぱいになるなど、場内はこの日一番の盛り上がりを見せました。1日を通じて約1,300人が伝統芸能の数々を堪能しました。



2月3日

一首ごと神経尖らせ札を取る

大井小学校で、市子ども会指導者連絡協議会主催の第27回かるた取り大会が開催され、市内の小学生82人と中学生16人が参加しました。

競技が始まると、会場は一斉に静まりました。上の句が読まれるやいなや、会場のあちこちから「はい」と威勢の良い声が上がりました。札をたたき音が響き渡りました。

乱取りは2回行われ、取った札の合計枚数で順位が決まりました。小学校の部の優勝者は、合計88枚を取った恵那北小学校6年生の小栗りほ佳さん。中学校の部の優勝者は、合計60枚を取った岩邑中学校2年生の遠山若夏菜さんでした。



1月26日

子どもたちが「火の用心」を呼び掛け

国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている岩村町本通りで、夜回りが行われました。これは文化財防火デーの時期に合わせ、文化財を火災から守る保護意識と、住民への防災意識を啓発しようと毎年行われているもの。市少年消防隊岩村地区隊員9人をはじめ市消防団岩村分団など総勢48人が参加しました。

先頭を行く子どもたちは、寒さ厳しい中拍子木をたたき「火事をなくそう岩村町」と、元氣よく声を上げました。岩邑小学校5年生の阪上天心奏さんは「とても寒くて大変でしたが、みんなが火の用心に気を付けてくれたらいいな」と感想を述べました。



1月25日

梅本さんが飛騨美濃特産名人に

上矢作町のトマト農家、梅本広市さんが県から飛騨美濃特産名人として認定され、市役所で報告会が開かれました。県では、風土を生かし、全国に誇れる銘柄や産品作りを地域で支える、優れた生産者を名人として認定。市内では、梅本さんが5人目、夏秋トマトの名人認定としては2人目となりました。

梅本さんは「自分にはふさわしくないとも思ったが、ありがたくお受けした」と話し「今後、トマト農家をもっと増やしていくために、若い人・新しい人を受け入れる懐の深さが必要と思う」と、今後の意気込みも語りました。